

鎮魂の物語としての『曾我物語』

山下 宏 明

一、はじめに

ここ二十年ばかり、中世文学研究の中で、『曾我物語』については、必ずしもその論が活発であったとは言えない¹⁾。その原因として、例えば『平家物語』に比べて、これをいわゆる叙事詩とは言えない、むしろ曾我兄弟個人をめぐる伝記物語と見るべきだとする論があるように、軍記物語の典型とは見なし得ないという作品の性格がある。しかし今一つの原因には、その成り立ちが示すように、濃厚な土俗性のゆえに、その成立の基盤や伝承者・管理者の究明を課題とせざるを得なかったこともあるだろう。しかし最近、その土俗性の中に、物語としての構造を探ろうとする動きが見え始めている。むしろこの土俗性の中に、「物の語り」としての、物語本来の基本的な構造を、それも物語始源の古代ではなく、中世においてとらえる可能性の模索が見え始めていると言えるだろう。

その土俗性の濃い物語の成立を言う場合、これまでの民俗学的な成立論²⁾が示すように、東国という地域性を考えないわけにはいかない。京都を主要舞台とする中央の文学に対し、当然それとは異質であるは

ずの東国地域という周縁の文学が、いかなる性格を有するか。中央に対する周縁としての東国において、源頼朝の手による東国政権の確立を無視できない。文学研究を状況論にひきつける性急さは慎しむべきではあるけれども、東国におけるこの状況の変化は、現在われわれが想像する以上のものがあつたはずである。例えば『平家物語』が、その成立に関して、東国生まれの性仏の語りを素材とした『徒然草』(二二六段)と言ひ、現に東国色の濃い非当道系の読み本が、『平家物語』の生成に大きな意味を有していること、なかならず東国の千葉氏の関係者が編述に参画したと思われる『源平闘諍録』が存在すること³⁾、これら東国の地域性の集大成としての『源平盛衰記』が存在することは、『平家物語』論にとつても、大きな課題を提示している。これら読み本系諸本の、非京都性を決定しているのが、頼朝挙兵の経過を語る部分であり、この点でもやはり頼朝の存在が大きい。このように見て行けば『平治物語』第一類本についても、同じ見通しがえられ得るであろう。いささか政治状況と文学とを直結しすぎるくらいはあるけれども、この頼朝の存在を抜きにして、この期の東国の文学はあり得なかつただろう。勿論それは、東国地域に中央からの貴種として入

り込んでいった頼朝を受けとめる東国の事情によるものである。よかれ悪しかれ、東国社会に、この頼朝の登場は、巨大な意味を有したものとと思われる。そのきわめて明確な足跡を示す一つが『曾我物語』の、それも、伝承から物語に定着した、もともと初期の形態を色濃く、伝えると思われる真字本の世界である。本稿は、真字本『曾我物語』を通して、頼朝の存在が、物語にいかなる意味を演じたかを、成立論としてではなく、物語の読みの問題として考えようとするものである。さらに具体的に言うならば、曾我兄弟の仇討という素材を、東国の文学としての物語が、頼朝の参加をえて、どのように構成して行ったかを問うことである。

二、物語の枠組み

物語の構造を考える場合、その冒頭の意味するところが大きい。この点、真字本『曾我物語』の場合も例外ではない。¹⁾
夫れ日域秋津嶋と申すは、国常立の尊より以来、²⁾（底本5頁。以下同じ）

に始まり、日本国土創成期の神々から人皇神武に及び帝王の始まったことを語り、その後の歴代の国土治政について、

二つの道有り、即ち文武の二道是なり、文を以ては政を和ケ、民を安んずる計ごとを廻シ、武を以ては四夷の乱を鎮メ（5頁）
と文武二道の必要なることを言い、本朝においては「中比」（6頁）から、源平両氏が、互いに奢れる者を鎮圧しながら四百余年を経過し

たとし、まず桓武平氏の系図を語りつつ、これが元暦二年（一一八五）に滅んだことを語る。³⁾ ついで清和源氏の系図をたどりつつ頼朝に達する。特に義朝以後、源平両氏が相並んで互いに奢りをいましめつつ、この頼朝に及んで世が平和になった。

是は偏に羽林の意符（威風）前代にも超えて重キが故なり（10頁）

と長々と系譜を語って来て頼朝の讃歌を以て結ぶ。この系譜の語りとは、明らかに頼朝讃歌を意図した歴史語りの意識の顕現である。その頼朝の源氏再興、天下平定について、鎌倉の地に勧請した八幡に対する頼朝の善根を強調する（巻三）が、ここにあって八幡の縁起をとり込み語ることも、この讃嘆すべき頼朝の治政に八幡の加護のあったことを意識するものに外ならない。この頼朝の、北条との提携による源氏再興への歩み、栄花への物語こそが巻三の主題をなす。しかもその頼朝の再起過程で、この頼朝の歩みを妨げた伊藤に対する頼朝の恨みをも語っていることを見のがせない。そして実は、これがこの後、物語の主役である曾我兄弟の行く手を決定づけている。その恨みとは、

○（もともと大庭景親ともども関東武士団の中、有力なる者として平氏方の一員であった）伊藤助親が、その娘と頼朝との仲を裂いたこと、

○この二人の間に生まれた若君を殺害したこと、

○頼朝を討とうとしたこと、

○問題の娘を江馬次郎に再嫁させ、頼朝の動きを阻止しようとした山

本判官兼隆に期待したこと、

などである。この伊藤とは対照的に、頼朝を保護したのが北条であり、この北条との対比が、一層この伊藤の短慮をきわ立たせ、伊藤を頼朝に対する叛逆者として位置づけする。事実、頼朝が天下を平定した後、伊藤助親は召喚されるが、

前日の罪科遁れ難シ、其上参りたらば首をゾ召されんずらむ、其由を申シ玉へとて(60頁)

切腹して果てる。一方、頼朝の東国での苦難の時代に、父助親とは違って頼朝をかばった子息助長は、当然赦されるが、父生前の行動を恥じ、頼朝の許しをえて上洛し、平氏に仕えることになる。かくして、とにかく頼朝の、伊藤に対する個人的な恨みは一応解決したことになる。

それにしても、物語の枠組みとして、この頼朝を登場させ、その天下平定の過程における伊藤助親の叛逆を語ったことが、この物語の主人公である曾我兄弟の運命を規定する。言いかえれば、祖父が頼朝に対してとった行動のゆえに、兄弟の運命が決定されるのであるから、物語全体の枠を構成するのが頼朝であると言える。いささか長文に過ぎると思われる、冒頭から巻三に及ぶ頼朝までの系譜と、その源氏再興への道が、実は、このように物語の主題である曾我兄弟の運命を規定する、物語の枠組みとしてあるものと読みとることが可能である。

三、事件の発端と、兄弟の行動の論理

曾我兄弟の仇討事件の発端は、周知の通り伊藤一門内部の土地争いと、その帰結として曾我助通が父助親に代って暗殺された悲劇にある。その土地争いを見る場合、事実としてその非は、工藤助継との約束を破って、本来ならばこの助継の子息金石(助経)に移譲すべき土地を巧みに横領した助親の側にあるはずである。しかし、その遠因がどこにあるかと、助親父子を討って伊藤・河津の両所を思うがままにしようとする工藤助経の企ては、物語の語り手にとって、

此の条に於て何が有ル可からむ、神慮尤も量り難し、冥の照讒モ不審、縦ヒ限り有ル道理なりとも、一方ナラぬ重恩を忘れて忽ちに悪行を工ミて其身モ何か有る可からむ(13頁)

つまり助経の行動も、自らを養育してくれた助親の重恩を背くものと言う。これが、物語において、曾我兄弟の仇討の行動を正当化するのである。助経の企てとその指示による大見らの動きを語って、その手にかかる助通の非業の死をとげるまでの経過を詳しく語ることが残された兄弟の悲しい境遇をひき出す。兄弟は、九月十三夜、雁の列を見て、片親の無い悲しみ、父無きゆえに体験せねばならぬわびしさを語る。このように、助経の、養育の父助親の志恩と兄弟の亡父への思慕を濃密に語ることによって、兄弟の、助経に対する恨み、怒りと、その行動を正当だとするのが物語である。

四、兄弟の叛逆と秩序

その兄弟に対し、助通の悲劇の直後、母は、

此等二人をば母の左右の膝に随いて、泣く泣く、己れ等諦聴
ケ、腹の内なる子ダニモ母の云ふ事を聞き悟りて親の敵をば討つ
ゾヨ（27頁）

とし、周の幽好王の遺児の例証をも引いて仇討をするよう誓わせるのである。にもかかわらず事件後四年を経過した養和元年（一一八一）、兄一万が九歳、弟篁王が七歳の年、——前述の兄弟が雁の列を見て嘆く場面の直後であるが——兄弟が、成人したあかつきに仇討を誓い合うところで、母は、世の聞こえを憚って兄弟を制止する。その母の言うところは、

汝等諦に聴ケ、汝等が祖父伊藤の入道は、当鎌倉殿の若君、千鶴
御前とて三歳に成らせ玉シを松河の洲に沈め奉りシ故に御敵と成
つて、先年伊藤の館に於て失はレ奉りヌ、己れ等斯ル謀叛人の孫
子共ナレば、便宜の有らむ時、敵の左衛門の尉に知ラセツツ、上
ミの御敵に申シ成して失はル可シ（70頁）

一度は幼い兄弟も頼朝に召喚された。その場は義父曾我助信のとりなしにより赦されたものの、母の言うように兄弟は頼朝にとってやはり、仇敵、叛逆者の孫である。後日、兄弟が富士野の巻狩りで決行せんとする意志を三浦余一に明かす場面でも、余一は、

思ひモ寄らヌ事を言ひ玉フ者哉、当世は昔に替て、左様の悪事を

する者は、狩庭にてモ有レ、亦旅宿にてモ有レ、討勝せて一步なりとも延てむや、殿原少しモ叶ふマジキ事ゾ、今度は思ひ留て、後々に私行の便宜を伺ひ玉へ（110頁）

と制止している。頼朝の治める天下に、こともあろうに、（その威を諸国に示すための）公けの狩庭に、仇討という私行のあるまじきことを言うものである。公けの場での行動であるがゆえに、その行動は公けに楯つく叛逆になるとするものである。事実、兄弟が事を決行し兩人ともに果てた後、頼朝は、土肥を介して、一小御家人にすぎない、兄弟の養父曾我助信を召喚し、

御座敷末に召されて、曾我の冠者原が今度の謀叛の由をば知らヌか（193頁）

として、兄弟の行動を「謀叛」ときめつけている。五郎も、目的を達成した後、頼朝に召し出されて訊問される場面で、祖父助親の最期を、君に誅せられたものと言ひ、逆にかたきの助経が君のおぼえめたい大名として重用されていることを言つて、

便宜吉クは御前近ク打ち上て、具に見参に入る可しと申シ候シかば現にと千万人の侍共を討て候はむヨリは、君一人を汚シ進セツ

、後代に名をば留メ候はむと存じ候シかば（182頁）と語る。本文に少々乱れがあるようで、文意がはっきりしないが、謀叛は覚悟の上、むしろ進んで頼朝にも一矢をむくわんとしたものと読み得る。

改めてこれまでの経過をふり返ってみるならば、事件の発端は、一

門内部の所領争いにあつた。意外にも助通が非業の死をとげ、兄弟は父無し子になる。その遺児兄弟の亡父への思慕が仇討の決意を固めさせるのであるが、重ねて祖父助親の頼朝に対する叛逆ゆえの非業の死（兄弟や母にしてみれば、祖父の自害は、頼朝の手にかかったものに見える）、一方、かたき助経の出世が、兄弟を叛逆児たらしめることにより、その行動を一層困難ならしめる、という物語の構想がたどれる。この兄弟の苦難の克服と目的達成の過程を語ることが、物語の核心を形成する。そして、もともと二人の行動が謀叛、叛逆として刻印されているがゆえに、兄弟は事を果した後に、死への道を歩むことになるのである。

事を決行するに先立って、十郎の奔走により、弟の五郎も母の勘当を赦され、母子三人でさかづきがとりかわされる。ここでも母は、巻狩りに参加する兄弟に対し、前の養和元年当時と同じように、

心の早りの任に鹿^まばシ射玉ふナ、上の見参に入らねば弓矢を持たず有る可^べし、謀叛の者の子孫が免シモ无^まき御友仕たりとて科^{とが}ラレヤ進^ますらむ（126頁）

と兄弟の真意には及びもしない。もともと謀叛人の孫であるがゆえに、弓矢を持つことすら、人の疑いを招くこととして制止するのである。事実、兄弟も自らの立場を十分に心えている。すなわち、兄弟は、母と別れて箱根路へかかり、鞆児川を渡る。兩人は、幼時からこの川を渡りつけたことを回想しつつ、今この川が、これまでどうって変

鎮魂の物語としての『曾我物語』（山下）

何ナレば今日水サへ濁ルト云ふ水波茂ク立ちツツ、渡瀬モ見ザルらむと語りケレば、五郎之^よを聞きて、未だ知ろし食^めさずや、罪人の渡ル河は濁るなり、死出の山・三途の大河と云ふ事有りとして、我等が思ひには鞆児河コソ三途の大河、菅根の御山コソ死出の大山ヨ、鎌倉殿コソ琰魔王ヨ、親の敵に合はむ処コソ琰魔の庁ヨ（127頁）

と言っている。秩序の具現者としての頼朝のひきもとで、その寵臣である助経を討とうとするおのが身が、さながら閻魔庁にひき立てられる罪人であることを覚悟している。それゆえに、事を決行する直前にも、

敵の一人を討たむ事は安キ事なり、善悪本意を遂ぐる者ナラば、急ギ自害をす可^べキ身共ナレば（171頁）

と、事をなして後、ただちに自害せんものと覚悟している。祖父の行ったしわざのゆえに、また公けの場で頼朝の寵臣を手にかけるがゆえに、その行動が叛逆行為になること、その結末はすでにきまつている。事を成就するまでの苦難、それを克服して後に待ち構えているのが叛逆者としての責めと死である。このわが運命を見届けながら、歩まねばならないところに悲劇がある。

祖父の、頼朝に対してとった行動のゆえに、秩序の側に立つかたき助経は出世を上げている。この二重の意味での兄弟の困難。公けの場で事を起こさざるをえない罪の意識。さらに物理的に見ても、頼朝がその威勢を示す狩場であるがゆえに、その警備は厳しく、兄弟の決行

を一層困難なものにする。兄弟を支えてくれるはずの母が、秩序の現状と、再婚の夫であり一たん兄弟を救ってくれた助信の身の上を考えて、兄弟の行動を許さない。全く閉塞状況にとじこめられる兩人。しかも、かりにうまく事を果たしても、その後には死がひかえていゝる。この兄弟の重層する苦難と死への道行を、物語の一つの大きな主題としているのである。

五、物語を進めるもの

その兄弟を行動へと押し進めるもの、それこそ物語を展開させるものであるが、それは何なのか。それは、見て来たように幼時の体験からする亡父への思慕と、仇討の誓いであるのだが、物語では、この兄弟の志を助けるものがある。上述したような敵しい状況にありながら、二人の行動を支持するものがある。

兄十郎は、母の思いを背き、第五郎を具して北条四郎時政を訪ね、その子息小四郎義時を介して、母や師匠の意に反して五郎を具して参っていること、その弟が還俗を望んでいることを言う。時政は、兄弟に対面して、

我と発心せざらむ法師は、現には悪シキ心も出来ヌ可シ、然に加様に打憑て坐ス事コソ喜ヒ入テ候へ(85頁)

と、早速五郎のもとどりを取り上げ、五郎時宗の名を与えて祝儀の酒宴に及び、鹿毛の馬に白輻輪の鞍をのせて与えている。頼朝を支えているはずの時政が、意外にも五郎の烏帽子親をひきうけたというので

ある。やがてこの五郎の行方が箱根に知れ大騒ぎになるが、後日、事の決行前に訪ねて来た五郎に対し、師匠の箱根別当は、涙ながらに兄弟に会い、五郎には、「一年九郎太夫の判官殿の木曾追討の為に上洛シ玉シ時、祈禱の為に権現に進らせて通り玉シ」(132頁)兵庫鎌の太刀を与え、十郎には、黒鞘巻の小刀を与えている。しかも別当は、問題の太刀が義経ゆかりの品であるがゆえに見知る者があるだろう。ただし「努努此僧が奉たると披露シ玉ふな」、そのわけは言ってはならぬことながら、「御在す殿原ナレば、若シ僻事モ出来らむ時、管根の別当こそ曾我の者共に、太刀小刀を取らせて敵を討たせタレと見参に入らん時は、勇大事なり」からだと言う。別当自身がいみじくも言い切っているように、別当は、半ば兄弟の決心を見抜いて、義経が義仲追討を祈願して奉納した太刀を与えたと云うのであるから、暗に兄弟の決行を支持したことになる。もつともそうは言いながら、太刀を贈ったことが頼朝の耳に入ることと恐れ、事実を語るなど口止めをするのであるから、表立って別当が協力したことにはならない。兄弟の志に共感を寄せながら、見て来たような兄弟の身の上、今行おうとする行動が頼朝の秩序に対する叛逆であることがわかってから、口止めをするのである。思えば兄弟の母は、十郎の元服に、父の無いため河津を名のれぬことを悲しみながら、五郎の将来については、なまじ元服しても、「汝が為にも心苦しカルベシ」(72頁)と考え、これを箱根へ送り、学問させ僧籍に入れようとしたのであった。

いよいよ巻狩の現場に兩人が事を決行するに際し、大事の前に兄弟

は、すき腹を満たすべく和田の館を訪ねる。食事をふるまわれ、酒を勧められるが、兄弟は大事の前なのでひかえる。もてなす和田も

骨无は申すナ、あの殿原には思ハシと御マツ在マす人々なり、今夜ナラずしては亦何の時に会アひの恥ハをば雪ユキメらる可ベキ (168頁)

として、早々と宴をうち切つたと言う。続いて畠山が、通りかかった兄弟を招き入れてもてなすが、

吉シタシ干飯をバ痛イタク勸メ奉ルとも酒は骨无ハシク誣ソウ奉ルナとて (169頁)

酒は制し、

何イかに候イふ殿原、今夜ナラでは方々の御本意をば何イの時にカ遂ケらル可ベキ (169頁)

と、明らかに事の決行を促しきえしている。言うまでもなく、兄弟の志が成就した後、二人の名声が高くなつてから逆照射して語つた場面である。これもさすが表立タつた援助はしていなければ、兄弟の志を十分に承知し、兄弟に支援の手をさしのべている。一体、なぜこの叛逆者である兄弟に、関東で有力な立場にあるこの三人が、心の声援を送るのであるか。表立タつた協力のできないところに、やはり頼朝という秩序があるであろう。その秩序を一応はばかりながら、兄弟に声援を送るのはなぜだろうか。物語は、この点について何も語らない。いや、語らないのが物語であるのかも知れない。これを関東の土豪たちと頼朝の秩序との関係においてとらえようとするのは、おそらく歴史学の課題になるだろう。物語としては、見て来たような、兄弟

鎮魂の物語としての『曾我物語』(山下)

の厳しい死への道行に、せめてものかけの声援を送らせようとするものであるだろう。

これも明確な支援の形はとらないけれども、暗にそれと思わせるのが、神仏の加護、利生である。

元暦二年(一一八五)十一月、管王は箱根に入山し、学問に励む。しかし、二十余人を救える同宿の兒たちのもとへは、年の暮れになると親たちから手紙や元三の装束などが送られて来る。中でも父から寄せられる、学問をよくせよなどといましめる文を見て、これを励ましとして学問に打ち込む者がある。しかるに管王のもとへは、母の文ばかりで、父の文が無い。改めて父を失つた悲しみにとざされる管王は、三所権現に詣でて、

怨敵降伏の願望を遂げん、親父讐敵の首を取て亡父戦苦の身代カハに立タて替カへ、黄泉中有の鬪諍を助けて快樂菩提の彼岸に至シラ令メン (73頁)

と祈る。物語は、ここできなりの長文にわたつて三所権現の本地について語る。その権現の靈験利生のあらたかなることを語るための本地であるが、それを語ることが、管王の祈願についても、

是程是の宿願をば何ナとか御納受无カル可ベキ、若シ敵助経が躰を見せ令メ玉ふマジクは、只今御宝前に於て忽に命を召せと祈念して、夜も竟オ暇オへ焦ホレけるモ哀なり、是程深キ祈念は争アるか権現モ御納受无カル可ベキ (75頁)

として、語り手の視点を以てその行方を見通す。さらに兄弟そろつて

三島明神に参るところでも、明神の縁起を語って後、その「実に恃ツク有リ」(137頁)権現に仇討の成就を祈願し、この願が聞き届けられないのなら、

御前にて我等二人を怨ミヤド鞠マに挙げて躰殺し玉へ、今日出て後は再び山より東へ返シ玉ふ可べからず、若し亦手ヲ空しくして返シ玉ふ者ナラば、返り様には宝殿の内に参り込こり腹を切りツ、五臓を搏つかみ出だして御戸帳に投なげ懸かケツ、御社に火を懸けて大明神をば焼き払はひて此処には御おは在まさじ(137頁)

と言う。祈願どころか、おどしをかけるすさまじさを見せている。具体的に、これらの神仏が兄弟の決行を助けたとは、この後も明言が無い。兄弟の執念と、それゆえのその後の兄弟の死を語る物語の展開が、本来ならば権現の利生を語るべき、その深層構造を變形してしまつたと言ふべきであろう。現に、仮字本系の大山寺本は、兄弟が、一たん助経を討つた後、重ねてとつて返し、とどめを刺すところで、我幼少より敵を見んと管根の権現に祈り申し、御前にて助経を見初はむるのみならず、一腰の刀を得たり。唯今止めを刺す刀は是こなり。権現の御恵と存じ、心静かに死骸を探り止めを刺しけるが(235頁)

とあり、同じく流布本にも類似の本文を見せていて、権現の加護があったとするその深層構造を露呈している。

今一つ、十郎の思い人、虎御前が、兄弟の本意を悟り、直接の援助はできぬまでも兄弟の心の支えをなして、巫女が英雄の行動を支

えるといふ古代からの伝承の世界に見られる基本構造を継承している。事実、この虎御前が、兄弟の亡き後、兄弟の母とともに兄弟の亡魂を死地にとむらい、その魂を鎮め浄土へ送ることになるのである。

六、物語の構築

事件を語る物語にあつては、事件が事件を呼び起こし、物語を終結へと向けて押し進める。これが『曾我物語』のような物語の基本的な構造であると言えること、上述の通りである。この物語の展開を、一層効果的に構築し、その展開を必然たらしめるために各種のモチーフをとり込む。

その一つに、登場人物の装束描写がある。軍記物語の方法の一つとして、ある場面の主役的人物について、その行動を語る場合、その人物の装束を語る。勿論、それは、その人物の属する階層、年齢にふさわしい装束を語るのが本来の形ではあるけれども、人物をその場面の主役と設定する語りが、その装束を、事実を越えて、その場面にふさわしいものに作りかえることをかつて指摘した。この曾我兄弟についても、数度にわたり敵にまみえる場面を描きながら、物語は、ついに兄弟が目的を達成する最後の機会、富士野の巻狩の場面において兄弟の装束を、

十郎が其日の装束は、下には母の手より得たりける連銭付けたる浅黄の小袖に、上には秋の野の蝶の丸の直垂に、夏毛の行臑の豊ヨ広ロナルに、気張キにて裏打たる竹笠タテを谷風ヤマカゼに糺ツツと駈カせて、鹿毛

なる馬に黒鞍置いて乗ル任に、切羽を以て作だりける大の鹿矢を
 管高に取て付け、所簾の弓の真中取て、四方に眼を省ツて引きた
 り、五郎が其日の装束は、下には母の手より得たりける白唐綾の
 小袖に、上には早河の伯母の手より得たりける、神无月の木本に
 鹿の妻恋の体に蕪の落葉を付けたる直垂に、星白の行騰の豊広な
 るに、鶴の羽を以て作だりける大の鹿矢を管高に取て付け、白簾
 の弓の真中取て、萌黄にて重打ちたる竹笠を峰吹く風に一搏覽セ
 て、鶴毛なる馬に白伏輪の鞍を置いて乗る任に(147頁)

と語っている。この兩人の装束の語りこそ、兩人の決行の場の到来し
 たことを語る記号であり、まさに、これが軍記物語の構造である。

また、上述したように、祖父助親の行爲を通して、兩人を頼朝に対
 する謀叛人たらしめる、いわはその条件作りをした、頼朝の挙兵まで
 の経過には、頼朝挙兵の仕掛人として文覚を登場させ、その文覚の出
 家の契機まで語っているところに明らかのように、『平家物語』を引
 き込んでいる。先行の『平家物語』を念頭に置きつつ、兄弟の状況を
 作って行ったと言える。

それに何よりも、兄弟にとっては、度々の機会のあったことを積み
 重ねながら、富士野へと場面をつないで行く。勿論、この間の兄弟の
 苦節を語るための手法であるが、兄弟をここまでひっぱり続けなが
 ら、最終段階を迎える語りの方法である。この最終場面の開幕に兄弟
 の装束描写を行うこと上述の通りである。そしてこの重なる機会を描
 くのに、

鎮魂の物語としての『曾我物語』(山ト)

○頼朝の將軍任官について、併せて助経の左衛門尉任官を語り、
 莊苑田島太多賜て配領シツ、隨分の稠者にて、夜モ日モ御身を
 離れず(68頁)

と頼朝に重く遇されたこと、

○頼朝の二所詣でに隨行する助経を見た管王は、助経に接近するが、
 梶原に妨げられる。しかも逆に助経の方から管王に声をかけ、

左の手を以て髪を昇イ摩デツ、右の手を以て腰の刀を押へて

(78頁)

現在の生活の状態を質し、

殿原の爲には親しき者とは今は助経許コソ候へ、見奉れば昔の
 事共を思ひ出されて薙に衰にコソ覚へ候へ、相構へて学文吉クシ
 て法師に成り玉ひツ、管根の別当を継ぎ玉へ(78頁)

と励ます。この学問をせよ云々は、あの五郎が入山当時、同宿の友
 人たちを励ましたその父親たちのことばであり、そのように声をか
 けてくれる父親の無い自らの身の上を嘆かせたことばであった。こ
 ともあろうに、そのことばをぬけぬけと父親氣どりで吐く助経。

○大磯で和田と居合わせた時にも、その場を助経が通り合わせる。兄
 弟は二人きり、対して相手は五十騎をひきつける。それは助経が、
 「我が身に敵有りと思ひケレば独り行ク事は无」いのであった。

○いよいよ仇討決行の当日、十郎が人々の館を見て回る中、石田に呼
 びとめられ、ここでも助経が同席する酒宴の座へ招き入れられる。
 そして助経の方から十郎に声をかけて、

左衛門尉ハ酒狂ニヤ有リケン、初対面ノ詞コソ広量ケレ、酒杯ヲ差し置キテ申ケルハ、随分御一門ノ片端ニテ候ヘハ、便宜ニ申し承ル可ク存ジ候ヒシニ、未ダ見参ニ入ラヌ事コソ本意ニ非ズ候ヘ
(157頁)

と語りかけ、そしてこともあろうに、

実コト耶、助経ヲバ殿原ノ親ノ敵ト言玉テ恨ヲ成し玉ナルハ、
而バ証拠ハ何事ゾヤ

と語り出し、

其ハ一向人ノ和諷ニテ候ふゾ、努々之ヲ用ひ玉ふ可からず……殿
原ノ父、故河津殿、伊豆奥野ノ狩庭返ノ時、流矢ニ中テ失セ玉ひ
シ……、今ハ御不審有る可からず、和与シ奉ルトテ、酒杯ヲ差し
ケレバ(158頁)

このことばとしぐさに、十郎は、心中、

啖カラヌ物哉、是程ニ思ひ蔑ツ、向イ様ニ云はル、事コソ口
惜しケレ(158頁)

この酒杯を投げつけて勝負を決しようと思うものの、事をなすには
五郎とともに約束していたことを考え、その場も自重する。

見るように、度々の機会にめぐり会いながら、事をなし得ず、その
度に相手の助経は有利さを増す自分の立場を利用して、あらぬお上手を
口走り、兄弟の怒りのほむらに一層油をそそぐことになっている。言
いかえれば、悪役としての助経が、兄弟の面前に姿を現わす度に、そ
の憎まれ役を演じて、一層兄弟の怒りをかき立てることになっている。

これら場面を積み重ねることによって、兄弟を一層のつびきならぬ状況へと追い込んで行くことになるのである。兄弟との対面において、助経の吐くにくまれ口が、兄弟を決行へといざない行くことにより物語を進めて行く。

七、解決

兄弟の仇討成就は、見て来たような物語の進行により当然の帰結として語られる。その過程を語るところに物語の一つの主題がある。問題は、その成就のみでは物語が完結しないことである。それは、すでに指摘した、兄弟をもともと秩序に対する叛逆者として規定したことに加わる。兄弟があらかじめ覚悟した通り、目的を達成しながら、叛逆者としては、かえってその最悪の点に達したと言うべきである。それゆえに物語は、このままでは完結しない。物語に頼朝を登場させたこと、その中世の変革期に、関東における頼朝の存在意義は、あまりにも大きい。物語がこの頼朝の秩序を枠組みとして発足している以上、この枠組みの処理無くして、物語は完結しない。

しかも兄弟は、事を成就しながら、叛逆のゆえに生きながらえられない。秩序はゆるがない。村上 学氏の指摘もあるように、この厳しい状況での五郎の行動のゆえに人々の同情をかいながら、五郎は、自ら縛る縄を「善の縄とは思ヒ玉はぬか」(179頁)と言い切っている。そこで物語のうつつ手が、あの幸若舞曲の『景清』の場合にも見られる、秩序の側の、兄弟の所行の公認である。この間の頼朝の心の動きを追

つてみると、

助経コソ限り有ル敵ナレば子細に及ばず、差したる咎モ無キ多く
の侍共をば誤りたるゾ (181頁)

と質す。五郎は臆さず、たとえ回りに千人の兵があつたとしても、か
まうことなく斬るはずであつた。ところがたれ一人相手になる者が無
かつたのだと答える。頼朝の期待した弁明は一切行わない。そして、
かくなつたのも運命が尽きたためである。祖父助経は、頼朝の勘当に
より「既に誅せられ候ひぬ」。しかるにかたきの助経は、君の覚えめ
でたく大名に補せられている。その恨みを思うと、頼朝の「御前近ク
打ち上て、具に見参に入るべしと申し」たとまで言い切る (182頁)。
予想したところを大きく踏み越える五郎の答弁に、さすがの頼朝も驚
き、男子の手本として、一たん助命を考えると、分別ある梶原らの
主張により、結局秩序保持のため五郎は処刑されることになる。しか
しその斬り手伸太は、五郎を鈍刀で斬つたため、頼朝の怒りをかい、
急ぎ筑紫へ逃げ下つたと言う (185頁)。見るように、物語における頼
朝は、一応、物語の枠組みのゆえに秩序に従つて兄弟をとがめ死へ追
いやりながら、これを単なる秩序の叛逆者としてはすませない。何よ
りも上述した、五郎と対決する頼朝の心の揺れが、このことをもの語
っているだろう。

その頼朝は、

何ナレば彼等が一門は皆豪の者共にて有らむ、一人モ陋臆たる者
共の无けるコソ哀ナレ (194頁)

鎮魂の物語としての『曾我物語』(山下)

と、事件にもかかわらず、かれらに一向暗さの無いことを感嘆し、そ
の仇討の原因となつた伊藤一門内の抗争について、

尋常なる恩を此の者共に仕タラマシカバ、而りとも此の謀叛を思
ひ留めてむ者を、恩を為すして失ヒヌル事コソ无慝ナレと御後悔
有りけるとか耶 (194頁)

と、かえつて自らが主人として臣下に恩を施すことの少なかつたこと
を後悔している。かくて、頼朝個人の心情としては、両人は叛逆の咎
を赦されたことになる。頼朝は、兄弟を日本国の武者として評価し、
その母を始め遺族に同情を寄せ、曾我の里の年貢弁済を、

二人の者共が孝養の為に母に取らするなり、(193頁)

義父助信にも、兄弟の

修羅道の苦患を助ク可しとて、公役御免の御教書を賜て (193頁)
と、兄弟の霊を弔うよう指示している。

かくて、一門内部の争いも、頼朝の赦しにより落着。兄弟の遺跡を
とぶらう虎御前は、熊野へ参つた後天王寺に逗留し、七日間の参籠を
する中に、備前の国、貴備津宮の往藤内の婦妻が参詣するものとめぐ
り会う。兄弟の仇討のまきぞえを食つて非業の死をとげた往藤内の遺
族である。今やかれらは、ともに故人をしのんで袖をぬらし、虎御前
の案内で往藤内の遺跡に参る。前に見たように、頼朝は、兄弟の所行
について、一時は、助経を討つはとにかく、まわりの人々をまき添え
にしたことに怒りを発したのであつた。それが京小次郎の未亡人をも
含め、関連の遺族の間で和解が成立することになつたわけである。

頼朝も、これまで兄弟に対しかげながら支援の姿勢を示した人々を赦し、かえって兄弟を

頼朝に訴へて首を刎^{キリ}せんと計りける(194頁)

三浦余一のふるまいを「奇怪ナレ」と叱りおく。やがて虎御前は、「駿河国の小林の郷」に入り、その地の森の中に、

曾我の十郎殿と五郎殿と、富士の郡六十六郷の内の御霊神と成らせ玉(206頁)

を見て、これに七日七夜参籠し、不断念仏を行って、十郎の霊と唱和を行っている。まさに巫女としての役割を演じるわけで、英雄としての主人公の神への昇華に参与してゆくあり方は、神の前生の苦難と昇天、その巫女の関与を語る説経浄瑠璃と同じ構造である。やがてこれら巫女たちの往生まで語り尽すのも『平家物語』の淮頂巻と同工である。叛逆者であるがゆえに、事を成就しながら死なねばならなかった兄弟の苦難の道行を語ることによって、その霊を鎮める物語が成り立つ。その兄弟の運命の枠組みをなすのが、関東の秩序の組織者源頼朝である。これを関東の在地の側から見れば、流離し来たった貴種を核として秩序を作り上げるのに、そのいけにえとして兄弟や助通、助親、助経を始め、その回りの人々をささげたのであった。同じような例が、一門内部の争いから、中央の介入により逆賊となり冥界に墮ちて行った将門を語る『将門記』にあったことを想起する。

注

- (1) 例えば山西 明氏の研究史展望『研究資料日本古典文学』2の「曾我物語」の項、昭和58年六月)が要を得ている。
- (2) 塚崎 進氏(『曾我物語伝承論』その一、その二)『芸文研究』昭和30年二月・十一月)を始め、角川源義氏(『語り物文芸の発生』昭和50年十月、福田 晃氏(『曾我語りの発生』上・中・下『立命館文学』昭和47年十一月―昭和51年八月など)に及ぶ。
- (3) 福田豊彦氏(『源平闘諍録』その千葉氏関係の説話を中心として)『東京工業大学人文論集』昭和50年十二月)
- (4) 以下、真字本の引用は、角川源義氏編『妙本寺本 曾我物語』昭和44年三月)により、読みやすくするため適宜送りがないをも使い読み下した。頁数は、底本の頁数を示す。
- (5) この主張は、『平治物語』の冒頭の序章や、『平家物語』巻一「二代后」の冒頭を思いうかべつつ語ったものである。
- (6) 荒木良雄氏校注『大山寺本 曾我物語』(昭和16年初版)による。
- (7) 山下『太平記』と女性(『新潮日本古典集成 太平記』)解説 昭和58年四月、『軍記物語の方法』再録)
- (8) この構造は、例えば『平家物語』淮頂巻における建礼門院のはたらきと共通するものである。
- (9) 「武者所の單存知すべき条々―軍記物語の様式―」(『名古屋大学国語国文学論集』昭和48年四月、『平家物語の生成』再録)
- (10) 「善の繩とは思ひ給はぬか―真字本曾我物語の物語構造―」(『中世文学会 昭和58年度春季大会の口頭発表』)

(昭和五十八年九月二十二日)